

千年の時を超えた海と山の交流

あづみ族がつなぐ

福岡と安曇野

PHOTO:Fumio Hashimoto

志賀島上空から見た博多湾と福岡市街地

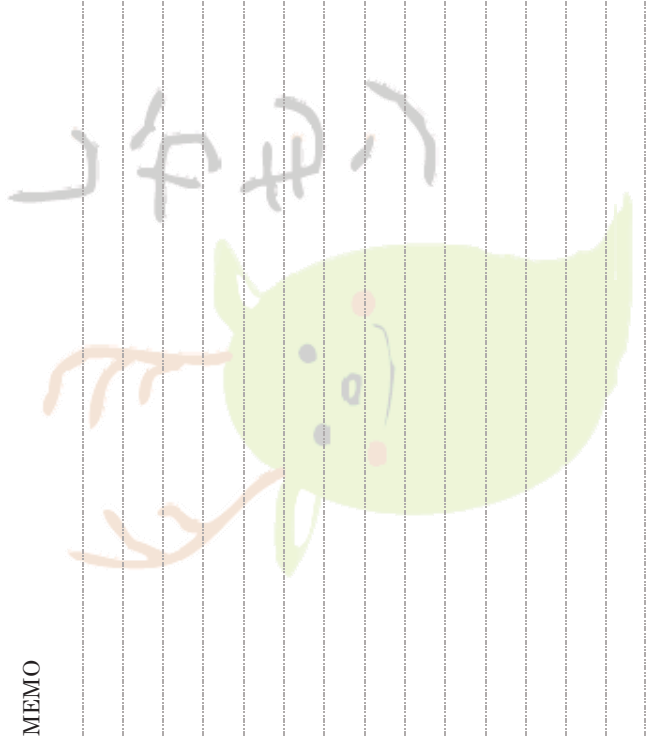
提供：福岡市

北アルプスの山並みと安曇野

提供：安曇野市

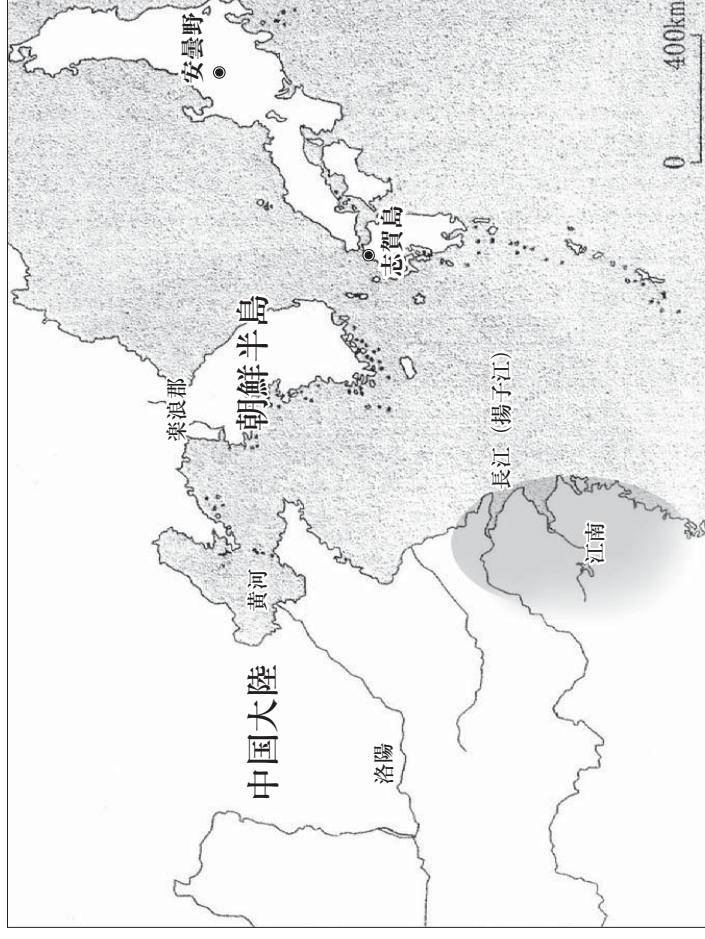
発行 東区民フェスティバル実行委員会
(事務局：福岡市東区企画振興課内)

MEMO



編集後記

この本は、東区内の小中学生の皆さんに、「あづみ族」の活躍と東区の歴史、それから安曇野市との交流を知ってもらうため、安曇野市との青少年交流事業を主催している「東区民フェスティバル実行委員会」が特定非営利活動法人 志賀島歴史研究会の協力のもと平成 25 年に作成したものです。「あづみ族」については、今日でもわからないことが多く、たくさんの方の古代史研究家の関心を集めています。今後、子どもたちをはじめ、多くの方にこの本を読んでもいただき、「あづみ族」や、郷土の歴史に興味を持っていただければと思います。

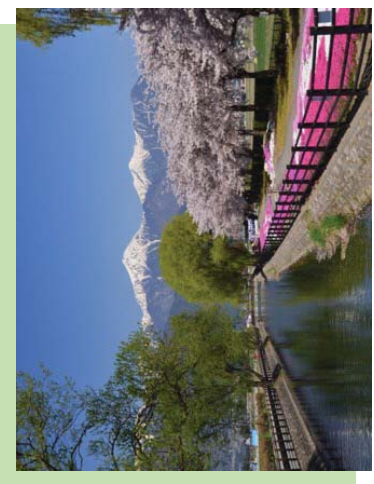


この話に出てくる地名

発行 東区民フェスティバル実行委員会
(事務局：福岡市東区企画振興課内)
第2版発行 令和元年12月



特産品	わさび りんご にじます そば
説明	長野県の中西部に位置し、西部には雄大な北アルプス連峰がそびえ立ち、東部は「安曇野」と呼ばれる平坦な扇状地になっています。全国名水100選にも選ばれ、冬には白鳥が飛来する清らかな里です。 平成17年10月に当時の豊科町・穂高町・三郷村・堀金村・明科町の5町村が合併して誕生しました。



拾ヶ堰とじてんしゃひろば



クリアボートで川下り (蓼川)



旧国鉄篠ノ井線廃線敷の紅葉



御宝田遊水池の白鳥

佳奈ちゃんの、『ふくおか・あづみの交流物語』

安曇野からの帰り

「もつすぐ福岡空港に到着します。」との機内放送に、佳奈ちゃんは目が覚めました。真下に広がる海には博多湾を玄界灘からとぎえる「海の中道」が腕のように伸びていて、その先端に佳奈ちゃんが住んでいる志賀島が橋でつながっています。それから、飛行機はどんどん高度を下げて、福岡のビルの上を滑るようになり、空港に到着しました。

佳奈ちゃんは、志賀島小学校6年生。夏休みに東区役所が募集した「東区と安曇野市との青少年交流事業」に参加しました。きっかけは、「大昔に志賀島の人々が安曇野に移り住んだ」とおじいちゃんから聞いたことがあったからです。

解説
 (注1) 安曇野市：長野県中部に位置する人口約10万人の都市。古代にあづみ族が移り住んだといわれ、地名も安曇郡とされました。「おだゆこと」を食べる習慣や方言など、北部九州と似た風習が知られています。



by 湘蘭夏子
主人公の佳奈ちゃん

福岡市東区について

※写真提供：福岡市

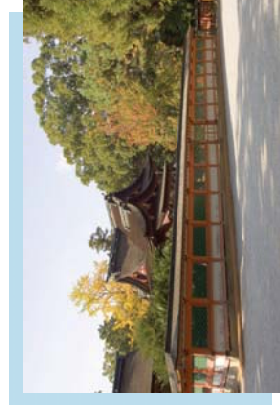
特産品	おきゅうと いちご 海産物
説明	福岡県福岡市の北東部に位置し、博多湾を囲むような形になっています。 海の中道や立花山・三日月山、多々良川など豊かな自然に恵まれているほか、国宝「金印」が発見された志賀島や香椎宮、菅崎宮などの歴史的資産も数多く残っています。



しまのしま 志賀島
かつま 勝島海岸



かみいざなう 香椎宮



はこみさくぐらほらけいじょうや 菅崎宮放生会



みしま 御島グリーンベイウオーク

この交流では、福岡市東区の小中学生10人が長野県安曇野市の小中学生10人と一緒に合宿しながら、昼は美術館や神社などを見学したり、夜はお楽しみ会をしたりと、今までにない体験をしました。今でも、目を閉じると安曇野の美しい風景が思い出されます。特に、2日目に行った上高地は、空まで届くもつな高い岩山に囲まれた、とても美しい渓谷でした。谷は深緑の森に包まれ、上流には夏なのに真つ白な雪が残っていました。志賀島の海のそばで育った佳奈ちゃんには、信じられない風景でした。でも、あんな遠いところまで、大昔の志賀島の人が移り住んだということが、どうしても信じられませんでした。

弘のおじいちゃん

次の日曜日、佳奈ちゃんは自転車に乗って、志賀島の西側の弘に住むおじいちゃんの家に行きました。途中の金印公園か



上高地の風景

解説

(注) 弘・志賀島の西海岸に位置する潜水漁で知られる伝統的な漁村。江戸時代には黒田藩から、アゴ漁の特権を与えられていました。



福岡市東区と長野県安曇野市の
交流について



福岡市と安曇野市は、海洋民「あづみ族」という共通のルーツを持つと伝えられています。二都市は、平成元年の「アジア太平洋博覧会」を機に、千数百年の時を経て交流を開始しました。ともにあづみ族と深い縁がある志賀海神社と穂高神社の協力のもと、現在も、子どもたちが毎年交互に訪問し、交流が続いています。



安曇野市：
松本市美術館、穂高神社、上高地、大王わさび農場、安曇野市役所庁舎、農家民泊

福岡市：
キヤナルシテイ博多、金印太鼓、下馬ヶ浜海水浴場（志賀島）、志賀海神社、金印公園

ら海の方を見ると、能士島のこしのしまや糸島半島いとまほとろ、福岡タワーや博多の街のビルが見えてとてもきれいです。佳奈ちゃんは、この風景が大好きです。

「お土産持ってきたよー」と、おじいちゃんに声をかけました。網あみの手入れをしていたおじいちゃんは、「ほお、わざひ漬やなかね。安曇野はどげんやったね？」と聞きました。

「とてもきれいな所で、おもしろかったよ。けど、おじいちゃんは、『大昔に志賀島の人安曇野に移り住んだ』て、言いよんしゃったけど、どうしてあんな遠い所に、大昔の人たちが行ったんやろ？」と、佳奈ちゃんは聞きました。

「そつたいね。じいちゃんも、最初はつもとは志賀海神社の阿曇宮あつみみや同どうさんから聞いたつたい。それから本は読んだり、交流団で安曇野に行ったりして、少しずつわかってきたつたい。」と、話を始めました。

解説

(注3) 志賀海神社…志賀島の南側にある神社。海の神様である綿津見神わたつみのかみを祀る神社の全国の総本宮もとのみやとされています。



志賀島（潮見展望台）から見た福岡の市街地

(注4) あづみ族は、古代に志賀島を拠点に活躍していた海洋民として知られている人たちです。またあづみ族は、船の扱いや海の事情に詳しく、いろんな地方の特産物を運んだりして、今で言う貿易会社みたいな働きをしていたという説や、今から2500年ぐらい前に、中国の江南地方から渡ってきて住み着いた人たちという説もあります。さらに江南地方は、米の原産地とも言われており、日本に米の栽培技術をもたらしたのもあづみ族だという研究者もいると、教えてくれました。



稲穂刈りの風景

解説

(注4) あづみ族…志賀島に關係する場合は阿曇族、安曇野地方に關係する場合は安曇族と標記されることが多く見受けられます。

(注5) 海洋民…海や湖を主な生活の舞台として、漁業、塩作り、水運、航海などを主な職業としていた人々。

(注6) 江南…中国の長江(揚子江)下流の南側の地方。現在の浙江省などにあたります。また、長江より南側全体を指すこともあります。

海の神様を祀る志賀島の人たちが、『ああらもい山、茂った山と、山をほめて感謝する祭たい。あんがら昔の人は、海と山がつながつてゐることを知つたとも。』と。

佳奈ちゃんはこの話を聞いて、志賀島と安曇野がつながっていること、日本と中国大陸や朝鮮半島がつながっていること、そして、海と山がつながっていることを知りました。そして、もともと安曇野が好きになりました。

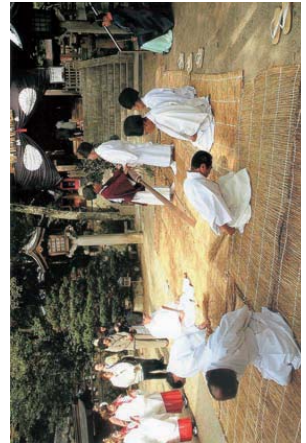
佳奈ちゃんには、志賀島の沖を通る大きなコンテナ船が、昔のあづみ族の活躍とつながっているように感じられました。(おわり)



穂高神社 御船祭り 提供:安曇野市

解説

(注7) 山ほめ…正式には、山着(種蒔)漁獲祭(やまほめたねまきかりまはりのまつり)。志賀海神社に、古代から伝わっている神事。「山が育つと田畑を潤し巡つて海の幸も育む」として、大漁・豊作を祈願する行事です。



志賀海神社 山ほめ祭

みんな、つながっている

佳奈ちゃんは、安曇野の穂高神社(注19) 穂高神社に行ったとき、大きな船の形をした山車(注20) 山車を使った御船祭りおふねまつりが行なわれていることを知りました。あづみ族は、海と船と海の神様を大事にしたから、山に囲まれた安曇野に移った後でも、そのよつな船を使った祭が続いているのだらうと、佳奈ちゃんは思いました。

そして、3000mを超す北アルプス連峰みちろに囲まれた上高地の明神池みんがわにも、穂高神社が祀られていて、海の神様が山々の守り神になっていることも知りました。その話をすると、おじいちは言いました。「この志賀海神社でも、春と秋とに、『山ほめ』があるが。



提供：穂高神社
明神池の神事

志賀島の金印

「どうして、そんなことがわかるの？」と、佳奈ちゃんは尋ねました。おじいちは、ちよつと考えてから「金印公園から発見された金印のことは知らうらうら。」と、次のよつな話をしてくれました。

江戸時代の中ころに、志賀島の金印公園の場所から「漢委奴国王」と刻印された金印かんのののみが出土したことは、よく知られています。この金印は、中国の後漢の皇帝しゅうていが、福岡市から春日市あたりにあった奴国の王に与えたものとされています。このことは、中国の歴史書の『後漢書』にも、奴国からの使者が来て皇帝に拝謁(注8) 拝謁したので金印を与えた、と



志賀島地図

解説

(注19) 穂高神社…長野県安曇野市穂高のほか、上高地の明神池と奥穂高岳山頂に神社があり、日本アルプスの総鎮守として知られています。主神の穂高見神は、志賀海神社の主神の綿津見神の御子神とされ、あづみ族移住の歴史を伝えています

(注20) 山車…お祭りの時に、いろいろな飾り物をつけて引き出す車。神様が乗っていると思われる場合も多い。

解説

(注7) 金印…1784年、東区志賀島で農夫により発見され、黒田家の家臣として伝えられました。西暦5年、中国の後漢の皇帝が、奴国の王を自分の臣として認めたと与えたとされています。現在、早良区巨勢町の福岡市博物館に展示されています。

(注8) 拝謁…皇帝など、地位の高い人に面会すること。

(注9) 大伴…古代の中国の人。周という国の王族の長子でしたが、位を弟に譲って江陵に行き、「吳」を建国したといわれています。

書かれています。また、別の中国の歴史書には、この時の使者が「自分は太伯の子孫である」と語ったと書かれており、江南にあつた『吳』という国を作った太伯の子孫であれば、吳国からの使者は江南からの渡来人の子孫といつことになります。この他、中国の歴史書には、九州北部の人が鯨面文身をしていることや、貫頭衣を着ていることなど、江南地方と似た習俗を持っていると書かれていて、「あづみ族は、江南から渡来してきた」といつ説の根拠となつていきます。



金印
福岡市博物館所蔵



金印印面



金印公園

解説

(注10) 鯨面文身… 顔や身体の皮を傷つけて、絵や文様を描く風習。

(注11) 貫頭衣… 布の中衣に穴をあけ、そこに頭を通して着る簡単な形の衣服。

海が人をつないでいた

佳奈ちゃんは、昔の志賀島の人であるあづみ族が、海を舞台にして大活躍をしていたような気がして、ちよつと語りげな気分になりました。そして、「じゃ、そん頃のあづみ族は、いろんなところと交流しつたつたいね。」と言いました。

「そつたい。昔は、飛行機もなかつた。自動車もなかつたし、それが通るよつな道もなかつたつたい。また、国と国をよそぎる境もなかつた。海が人が行き来する一番の大きな道じゃつたよ。船はそつば行き来して、人や物は運ぶ大事なもんじゃつたつたい。そん船ば動かす知識や技術を持った人たちが、あづみ族などの海洋民で、言われとる人たちたい。」と言いました。



「海を渡るあづみ族」イメージ
by 池間夏子

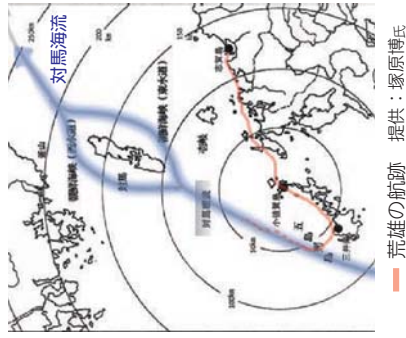


と連合して、中国の唐と朝鮮半島の新羅と戦った時、170隻もの船を率いて活躍したあづみ族の比羅末のことが知られています。(注1)はくまのえ 有名な白村江の戦いです。

また万葉集には、あづみ族の荒雄が、対馬の防人に食糧の米を送るため、志賀島から五島列島を廻り対馬に向かっている遭難したために、その死を嘆く和歌が残されています。どうして、大きく遠回りして五島列島から対馬に向ったかといつて、冬の玄界灘は北風が強く、当時の船では重い荷を積んで直接志賀島から対馬に行くことは大変危険だったからです。このため荒雄は、わざわざ九州北岸を西に進んで、平戸島から島伝いに五島列島の西の端まで行き、そこから沖を流れている海流に乗って、対馬に行こうとしたのです。その方が航海が安全で早かったからです。当時のあづみ族は、海の中を川のように流れている対馬海流のことがどういっても、よく知っていたのです。

解説

(注18) 荒雄…万葉集16巻に荒雄に関する和歌が10首よまれています。荒雄は、高麗の宗像一族の長に頼まれて、この役を引き受けました。志賀島には、荒雄をうたった万葉歌碑があります。



銅剣や勾玉が教える歴史

「なんとなくあづみ族のことがわかったけど、他にも何かわかるよつなものはないとね？えらい大昔のことやけんね。」と、またまた佳奈ちゃんは聞きました。

「そつたいね。考古学と三つ学問があるつたい。遺跡とかを掘って昔のことは調べる学問たい。あづみ族が活躍した頃の遺跡を調べると、いろんなことがわかると。」と、次のよつな話をしてくれました。

あづみ族が活躍した弥生時代から、九州と中国大陸、朝鮮半島との間では、よく人々の行き来がありました。当時、日本では銅や鉄がとれなかつたので、人々は豊饒や武器などを作るため、朝鮮半島から金属の材料をもらっている遺跡を作りました。志賀島の勝馬から細形銅剣の鑄型が出ていますが、これによって、志賀島で銅剣がつくられていたのではなから

解説

(注12) 細形銅剣…弥生時代に大陸から伝わりました。武器や祭器として使われました。

(注13) 鑄型…土や砂で作った型。溶かした金属を流し込んで武器や祭器を作りました。



博多区月隈から出土した銅剣
福岡市埋蔵文化財センター所蔵

言われています。これらの材料は、あづみ族などの海洋民によって中国大陸や朝鮮半島から運ばれたのだろつといわれています。

また遺跡では、^{かぎとま}勾玉と呼ばれる、^{まろしゆく}イヤリベグなどの装身具が発掘されます。これに使われている宝石の翡翠は、日本では安曇野に近い所でしか取れません。その翡翠の勾玉が、九州の遺跡や朝鮮半島の遺跡から見つかっていますが、これを運んだのもあづみ族などの海洋民ではないかと言われています。

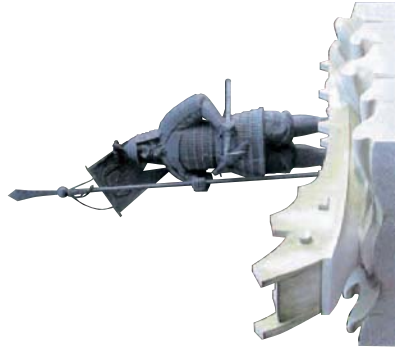
あづみ族は、各地で交易を行なつために、当時の貴重な交易品をもって日本の各地に出かけていったと考えられます。今日でも、日本の各地に残る『アツミ』や『シカ』に似た呼び名の地名は、あづみ族がいろいろな地方に移住し活躍したためではないかと言われ、その中でもよく知られているのが長野県の安曇野です。

あづみ族の活躍

「おじいちゃん、詳しいね。昔のあづみ族のことは、何かに書いてあるよね？」

と、佳奈ちゃんは聞きました。「そつやね。」と言って、お爺ちゃんは『日本書紀』や『万葉集』に書かれているあづみ族のことについて、話してくれました。

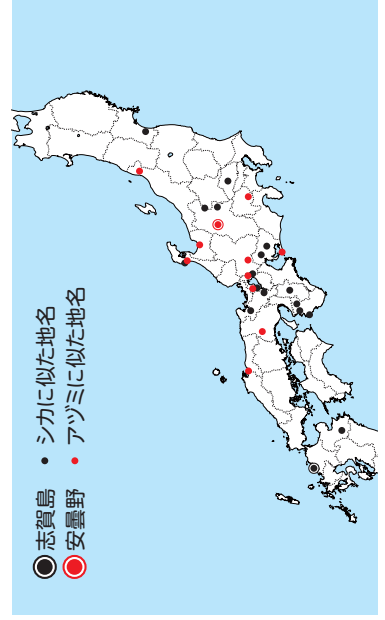
日本最初の国史といわれる日本書紀に、あづみ族の話がいくつかでてきます。最初に書かれているのが、^{おつじんてん}応神天皇の時にあづみ族の祖先である大濱宿禰が海の民の頭領に任命されたとあります。時代が下がつてその中でも、日本の倭が朝鮮半島の百濟



穂高神社の比羅夫像 提供：安曇野市

解説

(注14) 翡翠…深緑色で半透明の玉石。古代には、玉と呼ばれていました。



龜山勝著「安曇族と徐福」より

シカ・アツミに似た地名

解説

(注15) 国史…国家が定めた歴史書。

(注16) 比羅夫…百濟に派遣されていた武将。白村江の戦いで戦死したとされています。長野県の穂高神社に祀られ、命日の9月2日に「御船祭り」が行われます。

(注17) 白村江の戦い…西暦663年、朝鮮半島西側の白村江で行われた戦い。唐と新羅の連合軍が勝利し、その後の東アジアの歴史に大きな影響を与えました。「はくそんじつ」とも呼びます。